

あの水族館

こうじ

「あの水族館、行かないか？」

ビルの間隙からお月見をしていた晩、私の携帯電話が振動した。彼からのメール、久しぶりのデートの誘いだ。『あの水族館』とは初めて私達がデートをした場所だ。

彼とは付き合って三年。大学のサーフィンサークルで出会った。両親はサーフィンサークルに入部した私を『遂に不良になったか』『変な男と結婚するのか』と、あらぬ未来を押し付けてきたが、私はそんな近親の中傷にはどこ吹く風でサーフィンにのめり込んでいた。潮風の囁き。煌めく太陽。そして彼の存在だ。

潮焼けしたロン毛に赤黒い肌の彼は、正にサーファーといった風貌で、サーファー＝遊び人という方程式を頑なに信じる両親には、まともに紹介出来る代物ではなかった。彼もそこは承知で、たまにわざとらしく家に電話してきては、両親とのたわいない世間話をするぐらいの接点しかもとうとしなかった。

そんな彼からの水族館デートの誘い。お互い就職してからは忙しく、久しぶりのデートだった。就職氷河期といわれた私達の世代では珍しく、私達はすんなりと就職する事が出来た。私はサーフィンと海の素晴らしさに虜となり、プロサーファーの道も思案したが、将来の事も考え第三志望のスポーツ事業系の会社に就職した。当然彼も、海に関連する企業に就職すると思っていたが、あっさりと第

一志望の大手保険会社に就職した。

「ごめん、待った？」

「ちょっとな、行こうか」

「う、うん……」

待ち合わせ場所は、相模湾を一望する水族館
いつもなら待ち合わせに五分遅れただけでも
『おせえよ』と言って、私の頭にツッコミを
いれる彼。それなのに、今日は二十分も遅れ
た私に嫌な顔ひとつしない。何かがおかしい
就職してから、二人の呼吸のリズムは微妙に
乱れ始めていた。

『何かあったの？』

『ほかに好きな人が出来たの？』

私の頭の中で、？マークが行進している。
そんな思案をしてる内にも、彼は左足の踵を
わずかに擦る独特の歩き方で、私の数十m 先
を歩いて行く。私は雑念を振り払い、彼の背
中を見失わない様に早足でついて行った。

薄ら寒い連休の最終日の事もあってか、イルカショーは思った程、混雑していなかった。イルカの水槽を囲む様にして、階段状になった通路を彼と私は歩いて行く。時折、カップルや家族連れの見線を大袈裟に感じながら、私は空席を探した。前列から五列目の空席が目に入った。

「あそこの席、空いてるよ」

「あそこじゃ駄目だ」

「なんで？」

「水がかかるだろ」

「ちょっとぐらいかかった方が、面白いでしょ」

「子供じゃないんだぞ」

彼はそう言うと、後列から二列目の空席を指差し、すたすたと歩いて行き、すんなりと腰を下ろした。再び頭の中に、？マーク達の行進の足音が聞こえてくる。

初めてここでデートした時は、前から三列目に座った。係員から配られたビニールシートでイルカの水しぶきをよけて、それでもよけきれなくて、水がかかって、それでも笑い合っていた私達。。

『五列目ならビニールシートだって配られないし、なくても水しぶきもあまりかかんないよ』

私の心の叫びは彼には届かない。彼は私の？隊の行列には全く気付こうともせず、ズボンのポケットをまさぐると、よれた一万円札を

取り出し、私に渡した。

「これでなんか食べ物、買ってきてよ」

「わかった。何がいい？」

「まかせるよ」

「一万円もあったら、一杯買っちゃおうよ」

「無駄遣いすんなよ」

三年前の初めてここでデートをした時と同じ様なセリフに、頭の中の？マーク隊が踵を返して去って行く。そうだよ、この感じ。これでいいんだ。うまくいってる。私の考えすぎだ。プラス思考のノー天気が人生のコツだって、大物作家さんも言ってたっけ。

私は彼から渡された一万円を胸に当て、ぎゅっと握り締めると売店に向かう階段を軽やかに駆け上がった。

「まもなくイルカショーを開演いたします」

アナウンスがそう告げると、子供達は目の前の水槽で浮き沈みするイルカの様子に、立ったり座ったりを繰り返した。売店に着いた私はメニューを見ると、三年前に頼んだのと同じジンジャーチャイとチュリトスを注文した。

「ジンジャーチャイ二個と、チュリトス二個
お願いします」

「OK！」

売店の店員はカップルに人気があるこの水族館にはまるで不釣り合いな中年ヤンキー風の男で、リーゼントにサングラスに革ジャンと、ロカビリーファッションを彷彿とさせる出で立ちで対応した。

『よく採用されたな……』

待っている間にも、イルカショーは始まり、ポン、ポンと、水中から跳ね回っている。私は目の前で調理するロカビリー中年ヤンキーが、焼そばでも作るのではないかと、横目で冷や冷やしながら見つめていたが、意外にもとても美味しそうなジンジャーチャイとチュリトスが出て来て驚いた。

「しめて、ナインハンドレッドです」

「な、ないんはんどれっど？……九百円？」

「イエス」

「九百円ですね。じゃあこれで」

私は彼からもらった一万円を、中年ヤンキーに渡した。すると中年ヤンキーの顔が、見る

見る内に上気して、私をにらみつけた。

「おねえちゃん、細かいの無いのかい？」

やばい……殺される……。

「ごめんなさい！ 細かいのなくて、バック
の中にお財布あるんですけど、席に置いて
来ちゃって」

「それじゃあ、この一万円でけりをつけるか
い？」

中年ヤンキーはすでに鬼の様な形相で私の返
答を待っている。席まで戻って財布を取っ
てくる時間を与えてはくれなそうだ……。
考えろ、私の脳みそ！ ガムが百円で売って
る……そうだ！ これも買えば千円になる。
ならばお釣りは九千円に。小銭が少ない方が
生存率は高いはずだ……。

「そ、それじゃあ、ガムも買うので、お釣り
は九千円ではどうですかね……」

「ファイナルアンサー？」

「ファ、ファイナルアンサー……」

私は声を振り絞り、中年ヤンキーに返答した

「サンキュー！ 九千円のお返しです。あり
がとうございました！」

「あ、ありがとうございました」

中年ヤンキーはピン札のお釣りを渡すと、サ
ングラス越しに満面の笑みで私を見送った。
なんだ、良い人じゃないか。人を見かけで判
断しちゃ駄目だな。ほっとした私は、その場
でチュリトスに少し齧りついた。このチュリ
トスも外はカリッとしてるけど、甘さ抑えめ

で、中はフワフワで美味しいや。
私は地獄の閻魔大王に、思わぬ褒美を頂いた
様な気がしてとても有り難い気分になった。

「早く彼にも食べさせてあげよう」

私は振り返り、彼がいる天国の席を見つめた
天国？……

天国のはずだった……。

彼が携帯で誰かと話している。

誰と？

その顔は遠目にも、私が今まで見てきた彼の
笑顔のどれにも当てはまらなかった……。

告白

席に戻った私は、ジンジャーチャイとチュリトスを彼に渡すと、イルカショーに集中した数分前に目撃した彼の幻の携帯電話は、幻の笑顔と共に、彼のポケットにすんなりと収まっていた。さっきまで無愛想だった彼も、イルカ達の演技に翻弄されたのか、時折、笑顔まで見せる様になっていた。

イルカ？.....否、違う。

彼の笑顔は、イルカショーではない.....。

私が観た事のないイルカによってもたらされた笑顔だ。私に一万円を渡したのも、そのイルカとのたわむれの時間を稼ぐため？

目の前で幻想的な音楽に合わせて、華麗な大ジャンプを繰り広げるイルカ達は、もはや私には見えない.....。私の目の前には、数分前に観た彼の幻の笑顔.....それだけ。

イルカショーもフィナーレに近付き、どこからか大量のシャボン玉が飛んで来た。子供達はそれを観て興奮している。大人達も。彼もみんな楽しそうだ。でも私は、限界だった。

「ねえ」

「うん？」

「さっきさ、電話してたよね」

「ああ」

「誰？.....」

「彼女」

あっさりとしてイルカの正体を告白された私は、ショーをみて自制心をなくした子供の様に、席を立ち、その場から走り去った。

私はもつれる足取りで行き交うカップルや家族連れを辛うじてかわしながら、水族館の出口に向かう通路をひた走った。

だが意志とは裏腹に、私の足取りは地下へと向かう階段を下りて行く。一瞬で彼の前から姿を消す格好良い女になるつもりだった。

だけど、まだ『さよなら』を言ってなかった。そんな格好悪い心の迷いが、彼のエリアから遠ざかる私の足取りをゆるめたようだ。気付くと私は、薄暗く仄かに光るクラゲの水槽の前にいた。

クラゲの水槽は円筒形状で、青色**LED**に照らされ、とても幻想的だった。ここにいると、本当に宇宙人とやらの遭遇出来るのではないかという気になった。宇宙人？ 今の私にとっての宇宙人は、彼以外にいないではないか

『なんでそんなに簡単に告白するの？』

『私達が付き合った三年は何だったの？』

私の頭の中の？達が一齐に飛び出し、目の前の水槽で宇宙遊泳のごとく泳ぐクラゲ達に混じって、ゆらゆらと漂っている。

× × ×

どのくらい時間が経ったのだろう.....クラゲの水槽の前で私は呆然と立ちつくしていた。

ふと、背後に、懐かしい気配を感じた.....

宇宙人の気配.....彼だ。

彼と私を繋ぐ不思議な引力.....

まだ残ってた.....。

「やっぱりここか」

「.....」

「クラゲ、好きだったろ」

「.....」

「なんも喋りたくないよな」

「.....」

沈黙が続いた.....。クラゲは、そんな私達の重力には影響されず、無邪気に水中を漂っている。そんな中、私の視線は、一匹の少し元気のないクラゲに注がれていた。するとどこからか、**UFO**の如く七色に光るヒレを持つ粹の良いクラゲがやってきたかと思うと、あろう事か、その**UFO**クラゲは、元気のないクラゲに近付くと、一気に丸のみにした。

私は思わず『あ！』と、声を上げた。隣にいたカップルも、同じタイミングで声を上げていた。突如、繰り広げられた予想外の自然のスペクタクルに目の行き場を失った私は、思わず彼を見た。すると、彼は全く動じる様子もなく、丸のみをしたクラゲをじっとみつめていた。

「ウリクラゲだ」

「ウリクラゲ？」

「同じ有櫛動物門のカブトクラゲを補食するんだ」

「共食って事？」

「そういうことだね」

大学で生物学を専攻していた彼は、その派手な容姿からは想像も出来ないほど丁寧な説明をしてくれた。大学のキャンパスで一緒に歩いた時の彼を思い出す.....。

そうか。さっきまで話していた彼は偽物だ。小説や映画なんかに出てくる、もう一人の自分を目撃する現象。ドッベルゲンガーってやつだ。あれに違いない。

私と彼はやっと今、再会したんだ。

行方不明になった彼に、やっと再会出来た彼女というシナリオを勝手に頭の中で構成して私は女優気取りで相づちを打った。

彼も興に乗ってきたのか、クラゲの雑学なども披露してくれる。

『男と女は、いつだって現在進行形だ』なんて、名言も浮かんきたぞ。リズムを取り戻した私はクラゲ話に華を咲かせた。

私は彼に問いかけ、彼が私に即答する。言葉のキャッチボール。

なんて清々しいキャッチボールだ。けれども次の彼のストレートが、二人の間の金縛りを解いた。

「俺達もこのクラゲと一緒に、共食いみたいだな」

「え……」

現実という物語のラストシーンが近付いていた。

それからの彼と私は、水族館を出た後、駅への帰り道へと続く海沿いの道を歩いた。この日の夕日は、琥珀色のとても綺麗な夕日で、遠くには威厳をもった富士さんが、私達をしっかりと見据えていた。私と彼は駅までの帰り道、なぜだか終始、和やかだった。

これからラストシーンを迎え得ると思われる二人とはまるで縁遠く、よく喋り、よく笑いこれまでの二人の道程を語り合った。暫く歩くと、国道に辿り着いた。この国道を横切れば、帰りの駅はもうすぐだ。そこがゴールになるのだろう。

その時、彼がおもむろに呟いた。

「俺も寂しかったんだ……お前の気持ちがわからなくて……」

彼のこの言葉に、遂に私の頭の中の？達が白旗を上げた。戦意を喪失した？達が、私に語りかける。

「もうやめなさい、恋愛ごっこは」

「恋愛ごっこ……」

？達のこの言葉……私には記憶があった……中学生の時、初めて付き合った彼に、別れ際に言われた言葉。

「なんか俺達って、最後までゲームみたいだったな」

そう言って、最初の彼も、私の前から姿を消した。

共食い.....ゲーム.....そう、そうなんだ。
すべての元凶は、私なんだ.....。
私は今まで、恋愛ドラマを演じていたのだ。
現実という、巻き戻しの出来ないドラマで、
私の脚本に興味を示した異性を巻き添えに、
恋愛ドラマを演じていたのだ。

いつからこんな風になったのだろう。。

私の実の父親は、私が小学生の時に、交通事故で亡くなった。実父がいなくなって一年後母はすぐに別の男性と再婚した。母の移り身の早さには驚いたが、なにより驚いたのが、再婚の相手の男性が私を一目見るなり私の事を。「君は僕の大切な娘だ」と言った事だ。

「大切な娘？」 「何が大切？」

困惑する私をなだめる様に、母の声が重なる
「お父さんがいた方がなにかと便利でしょ」
当時の私は自問自答した。父親を一年前に交通事故で亡くした十代半ばの子供に、かりそめの愛を植え付けようとするこの親は、本当に人間の親になる資格があるのかと.....。

無抵抗な私は、いつしか道化師達に従った。
道化師達は、私に執拗に優しく、苦勞をさせまいと、あらぬ限りの愛を注いだ。
けれども私は、その愛を汲み取ろうとはしなかった。誕生日に欲しかった腕時計をプレゼントしてもらった時も、喜んだフリをして道化師達の表情をうかがっていた。
本当に欲しい時計は、ほかにあった。でも、私が喜ぶ顔を見て道化師達がいつか、その仮面を脱ぎさってくれるのを期待して私は嘘をつき続けた。

気付いたとき、私は道化師達と同じ仮面を被

っていた。自分の力では決して取る事が出来ない仮面を着けた自分がそこにいた。

道化師となった私は、この仮面を剥ぎ取ってくれる人間を捜し続けた。それは最初、学校の恩師であったり、気の合う友達であったりした。けれどもこの仮面は、もはや常識的な関係性で剥ぎ取れるほど脆弱なものではなかった。この堅牢な仮面を剥ぎ取れるのは、かけがいのない愛……とびっきりピュアな……命懸けの愛……。そんな愛、都合が良すぎるか……。

長い回想の旅を終え、現実に戻ってきた私は気付くと国道を渡っていた。そうだった。ここを渡って、駅に着いたら、彼とバイバイだろう。そのはずだった。。

周りを見渡すと彼がいない？ 後ろを振り返ると彼がいた。彼が私に向かって大声で叫んでいる。その声に横を見ると猛進するダンプカーが、私のすぐ側まで迫ってきていた。

やっちゃった……。

考え事をして周りを観ない悪い癖が、こんな所で出たか……。格好悪い最後だな……。まあでも、父親と同じ散り方なんて、私のドラマにしては、上出来か……。

極短い時間の間に、私はすんなりと宿命を受け入れた。永遠の眠り……。きっと私は今までずっと、眠りたかったのだろう……。

迫り来るダンプがスローモーションの様になってきた。交通事故を経験した人がよく言っていたけど、本当にこういう現象があるんだなと、死を前にして私は冷静だった。

ダンプの轟音を間近に感じながら、私はゆっ

くりと瞼を閉じた。

こんなに彼の近くにいるのに、私はひとりぼっちだ……。あと数分後には、三途の川とやらに立ってるのかな……。

瞼の裏に広がる漆黒の闇。私はその闇の中空をみつめ続けた。すると純白の花びらが一枚ひらひらと落ちてくる。花びらはそのままゆっくりと、私の掌の上に舞い降りた。

次の瞬間、激しいブレーキ音が私の幻想の世界に鳴り響いた。朦々と砂ぼこりが舞い上がる。ダンプよりも一瞬早く、私の体に何かが衝突した。柔らかく、温かく、力強い何かが私を抱きしめている。私はそっと目を開けた花びらの正体……。

抱きしめていたのは彼だった。

「馬鹿野郎！ どこ見て歩いてんだ！」

ダンプの運転手の荒々しい怒声が辺りに響く。彼は私を抱き上げると、車道の傍らに避難させた。ダンプカーがけたたましいエンジン音を鳴り散らし去って行くと、それに続いて後続車も動きだし、止まっていた時間も動き出した。

「ちゃんと前見て歩けよっ」

「ご、ごめんなさい……」

「怪我してないか？」

「大丈夫……」

「よかった」

気付くと私は、彼の腕の中で泣いていた。彼はそんな私を落ち着けようと、しばらく抱きしめていてくれた。でも私は、彼に抱きしめられるほど、涙が止まらなくなっていた。この涙の正体は、恐怖からきたものではなかった。彼が一途に、自らの命をも顧みずに私を助けてくれたからだ。

「なんで……助けてくれたの……」

「そんなの当たり前だろ」

「当たり前……」

「愛してるから」

私はそれ以上、何も聞けなかった。長年、私が描き続けていた都合の良い愛を、こうも簡単に悔いる事なく捧げてくれた彼の一生分の愛の前に、もはや私の全身は、泣く事ではか機能しなかった。脳裏に、数分前に

瞼の裏にみた、純白の花びらが甦る。
掌に触れた、花びらの温かみ……。
なんて温かいんだろう……
なんて優しいんだろう……
なんで私は本気で彼と向き合わなかったのだ
ろう……。

これが、私が追い求めていた、無償の愛の正
体か。
私はこの時、生まれて初めて、他人の幸せを
心底願った。

彼を幸せにしたい……。

？達が、私に微笑む。

答えは簡単。

「別れる事だ……」

夕方の海沿いの駅の改札口は、人がまばらで潮の香りが充満していた。駅に着いた私達は暫く無言のまま、改札の前で立ち尽くしていた。

「切符、買ってくる」

「ああ……」

無言に堪えきれなくなった私は、切符売り場へと向かった。平静を装うので精一杯だった

切符売り場に着くと、一組の老夫婦が、切符を買うのになにやら苦戦している様だった。時間がかかると思った私は、（本当は時間よ止まれだが…）隣の券売機へと向かった。

私はタッチパネルをみつめた。私達の最終電車の切符の金額が煌煌と輝いて見えた。覚悟は決めた。でも、押せない……。

幸いにして、私とその老夫婦以外には、誰も並んでいない。私は券売機に紙幣を、ナマケモノの如くゆっくりと入れる。タッチパネルを押そうとした所で、隣の老夫婦の夫に呼びかけられた。

「あの～すみません、〇〇駅までは、このボタンでよろしいですかね？」

老夫婦は、お揃いのサーファーの様なサングラスをしていて、よく見ると夫は、白い杖をもっていた。妻が夫の空いている片手を握りもう片方の手で、妻が傍らの点字運賃表をなぞっている。どうやら二人とも、目が見えないようだ。私は少しでも時間と良心を稼いだ

く、老夫婦に真摯に対応した。よくみると、妻のなぞる点字運賃表の部分にガムがこびりついていた。そうか、これで上手く読み取れなかったのか。なんて悪質だ。私は夫に運賃を教えたと、即座に妻がなぞる点字運賃表のガムをこそげとった。

「ガムがついていました。情けないイタズラです」

「あとちょっとで読み取れそうだったんですけどね」

「そうだな、あとちょっとだったな」

老夫婦はそう言うと、頬を寄せ合う様にして微笑んだ。

私はこの盲目の老夫婦の微笑みに感服した。この老夫婦は今まで何度、こんな経験をしてきたのだろう。そして、何度、涙を分かち合ってきたのだろう。

「どうもお騒がせしました。ありがとう」

「どういたしまして」

去っていく老夫婦の後ろ姿には、障害などを全く感じさせない幸せのオーラが満ち満ちていた。

私と彼は共食いなんかじゃない。私が一方的に、彼の愛を貪り食べていたんだ。共に涙を分かち合い、共に手を取り合って、育てていくのが愛の正体じゃないか。

いつか私も、こんな老夫婦の様になれるのだろうか……。

私は深呼吸をすると、最終電車の切符のボタンを押した。

最後のキス

「お待たせっ」

私はあらぬ限りの元気を振り絞って、改札口で待つ彼に明るく声をかけた。彼は小さく頷いただけだった。私は掌にくい込んだ切符を取ると、彼に渡した。彼は切符を取ると、機械的な動きで動改札機の投入口に入れ、ずり通り抜けて行った。

私もそれについて行く……はずだった。

「どうした？」

固く閉ざされた自動改札機のドアの前で、私の体は完全に停止した。

「行けない……」

「どうして？」

「切符が買えないの……」

「買えない？ なら俺が金を」

「もう買いたくない」

私の言葉にすべてを悟った彼は、暫く私の事をじっとみつめていた。その眼差しは、駄々をこねる娘を、遠くから見守り続ける、父親の様な温かい眼差しだった。

「別れよう……」

気付くと私は、素直にこの言葉を彼に告げていた。私は彼がこの言葉を聞けば、私の呪縛から解放され、穏やかな表情になると思ったが、彼はとても悲しそうな表情をした。

「それでいいのか？」

「うん……」

「わかった……でも……」

「でも？」

彼はそう言うと、自動改札機のドアの前で佇む私に近付き、強く抱きしめた。この日、彼の二度目の抱擁に、私の体はすでに脱力し、何も反応する事が出来なかった。

けれども私はもう、道化師ではなくなっていた。確かに彼の愛を感じる。抱擁を通して、彼の愛がインストールされてくる。眠っていた私の中の愛が、完全に起動した。

「ワタシハカレヲアイシテル……」

機械仕掛けの錆び付いた私の脳みそが、ようやくこの言葉を検索した。私は嬉しかった。自分の魂が、この言葉を、心の泥沼から自力で救い上げた事に。私の魂は死んでいなかった。けれどもう、ゲームオーバーだ……。私は彼の腕を解くと、突っ放した。

「下手くそ」

「え？」

「全部下手なの！ 抱きしめるのも下手だし嘘も下手！ 私の真似してプレイボーイにでもなったつもり？ 百年早いのよ！ ああもう、うんざり！ これで別れられると思うと清々するわ！」

「何言ってるんだよ」

「わかんないの？ ボランティアよ！ ボランティアで付き合ってあげたのよ！」

「ボランティア？」

「みじめで情けないあなたと、しょうがなく付き合ってあげたのよ！」

「本気で言ってるのか？」

「本気よ！ マジうざかったのよ！ 女々し

「いったらありやしない！ シツ、シツ！」
「そうか……」
「早く私の前から消えてよ！ マイナス思考
がうつるでしょ！」

私はそこまで言うと、堪えていた涙を、全身
から吹き出す様に泣いてしまった。彼はそんな
私を黙ってみつめていた。

「わ、私は、あなたの事なんてっ、、、
死ぬほど、愛してなんてなかったから！
もし、生まれ変わってもっ、絶対に！
あなたの事は、好きにならないから！」

私は体の中に残っている彼への涙を、一滴も
残さず、彼へと注いだ。
ホームのアナウンスが電車の発車を告げている。
彼はゆっくりと後ろを振り返り、電車を見つめ、
もう一度、私の事をじっとみつめた

「あなたの事なんて、もう二度と見たくない
から！」

限界だった。私は尚も溢れ続ける涙の洪水を
せき止める為、まぶたを閉じた。目の前に、
慣れ親しんだ闇が広がる。。
やっぱり私には、この小宇宙がお似合いだ。
誰もいなくて、静かで落ち着く。。
道化師から人間になったばかりの私に、この
ラストシーンは、あまりにも刺激的だ。
こうして両目を閉じていると、あの盲目の老
夫婦の気持ちが、少し理解出来た気がする。

でも、私はひとりだ。。きっと永遠に。。

彼はまだ、私のエリアにいるのかな。。もう

とっくに電車に乗ってるのかな。。

孤独の無重力が私を包み込んだその刹那、
ふわりと懐かしい重力が、私を抱きしめ、そ
して、キスをした。。

やっぱり彼だ。

目を瞑ってても、彼を感じる。

でも、これが本当に最後のキスだ。。

ゆっくりと彼の重力から解き放たれていく。

彼が呟いた。

「ありがとう……」

発車のベルがこだまする。

遠ざかる彼の足音。。

ガタゴトと電車が走り去る。

すべてを巻き戻す為なら、目を開けて、電車
の前に飛び込んででも、彼と別れたくなかつ
た。でも、私は決して目を開けなかった。

私も彼を『愛しているから』

「ねえ、あの水族館の前で停まって」

私は夫と子供を連れて、ドライブがてら久しぶりに『あの水族館』の前を訪れた。

彼と別れてから、15年の月日が流れていた

長年勤めた会社を退職して、職場で出会った夫と共に、小さいながらも海沿いに小さな喫茶店を開いた。夫が入れるコナコーヒーは、夫がハワイに留学中に毎日飲んでいてハマったコーヒーで、現地で修業した本格的なものだ。私はケーキ作りを担当している。開店に伴い、夜間の調理師学校や、ママサーファー達の意見を聞きながら学び、今では近隣の住民の間では、ちょっとした名物スイーツとなっている。7歳になる息子も、慣れない手つきで店を営む私達夫婦を心配してか、家事なども手伝ってくれ、小さいながらも幸せな家庭を築けたと、毎晩、川の字になって寝る度に、喜びを噛み締めている。

『あの水族館』は、経営難と老朽化などから先月取り壊しが決定した。

車を降り、嫌がる夫とはしゃぐ子供を連れてもうすでに人気のない水族館の周りを歩いたシャッターの下りた水族館の入口は、私の記憶の中の煌めきを一掃するほど、灰色で包まれていた。

「こんな所で降りてどうするんだよ？」

「昔、この水族館に来た事があるのよ……」

「デートばっかしてたんじゃないの

？」

「そんなんじゃないわよ」

「そっか。まあ、よく見ときな。もうすぐ取り壊されるんだろ」

「うん...」

「先に子供連れて、車に戻ってるからさ」

「ありがとう.....」

水族館の奥へと進むと、昔と変わらない相模湾が目の前に広がった少し冷たい潮風が私の頬をかすめていく。

彼はその後、どうなったか.....

私と別れた後、彼は仕事で海外赴任が決まりそこで出会った現地の女性と結婚した。彼は現地の子供達の劣悪な教育環境などを危惧しボランティアで学校建設のプロジェクトを立ち上げた。不眠不休で学校建設に取り組み姿勢に賛同者も集まり、念願の学校建設に辿り着いたものの、その開校日に、通学途中の子供が車に轢かれそうになる所を身代りになり短い生涯に幕を閉じた.....。

彼の友人のサーファーからそのメールが届いた時、私は驚きよりも彼らしい最後だなと、誇りすら感じた。私の事を身を挺して守ってくれた彼と、何も変わってなかったんだなともちろん、最後に駅で別れた時の様に、否、それ以上に、全身の涙が枯れるほど泣いたのは事実だが.....。

夕方の喫茶店の営業がひと段落付く頃、私はいつも二階の寝室の小窓から、海に沈む夕日を眺める。夕日を眺めていると、過去の記憶が夕日の灯りに吸い寄せられる様に甦ってくる。迷子にならない様に、必死に付いて行った、実の父のおぼろげな後ろ姿.....。陽気に

振る舞ってきた母が、私の結婚式の前夜に、
涙ながらに私の手を何度も握った、母のシワ
だらけの手……。そして、彼と別れた改札口
で目を瞑り泣き崩れる私……。

過去の記憶を回想する時、何が一番苦しくて
何が一番楽しかったか、なんて、面倒臭い事
はあまりしなくなった。

すべては、つながっているのだから……

私はただ、見つめている。

水平線に沈もうとしているあの夕日を。

記憶の中で光り輝く『あの水族館を』。

誰かが私の肩を叩いた様な気がして振り返っ
たが、誰もいなかった。

遠くで駐車している車を見ると、夫と息子が
手を振っている。

もう行こう。あの子達に夕飯を作ってあげな
きゃ。

潮風で冷えた涙を拭い、私は家族の待つ車へ
と走っていった。

あの水族館

<http://p.booklog.jp/book/34307>

著者：こうじ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/guruji/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34307>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34307>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.